

4000万人の頭痛

81

頭痛にまつわる都市伝説

第1回 〈何となく怖いイメージは濁音から?〉

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

確証はないけれども、何となくありそうな、都市伝説、実はこのような都市伝説は医学界にも多く存在しているのです。今回はそのような医学会の都市伝説の中でも、私の専門の頭痛分野に関連した都市伝説を全十回シリーズで皆様にお伝えしようと思います。

さて、頭痛といえば、なんとなく怖いというイメージが付きまといがちです。一般に医療機関を受診するとすぐにCTやMRI検査をされるのは、生命予後に支障をきたす脳腫瘍やくも膜下出血などのいわゆる二次性頭痛を否定し、医師と患者様の双方が安心感を得たいという心の裏側の現れでしょう。しかしこれらの二次性頭痛以外の、生命予後には支障はきたさないが、痛みのために日常生活に支障をきたしやすい片頭痛や緊張型頭痛などの一次性頭痛(慢性頭痛)、とわかって受診しても何となく、あまりよく診てもらえず、結局、市販の頭痛薬と変わらない鎮痛薬を処方されてしまうことが多いのは、やはり医師の心の奥に頭痛は命に係わる怖い病気という潜在意識が働いているためと思われます。

さらに頭痛は怖いというイメージを

助長しているのは、ずつうの“ず”の濁点がいけないのではないかと常日頃考えています。では英語に翻訳してみるとどうでしょうか?頭痛はご存知の通り、headache(ヘッドエイク)、また片頭痛はmigraine(マイグレイン)もしくはミグレイン)と、“ド”“グ”が入ってしまい、やはり濁点から逃れることはできないようです。

また頭痛の治療薬に目を向けてみると、やはり濁点から逃れることが難しいようです。例えば片頭痛の予防薬として医師がよく処方する薬剤のバルプロ酸ナトリウム(商品名デパケン)でも、“バ”“と”“デ”が付きまといまいます。また片頭痛と発作頓挫薬として処方される5種類あるトリプタン製剤にも濁点の含まれるものが多いのです。代表的な成分名スマトリプタンの先発商品名はイミグランで、“グ”が入り、成分名ゾルミトリプタンは先発商品名ゾーミツグで、“ゾ”“と”“グ”、成分名ナラトリプタンは商品名アマージで、“ジ”が入っているのです。成分名リザトリプタンは、先発商品名はマクスルトと比較的柔らかい響きを与えてくれますが、成分名表示を主体とする後発品商品名には成

分名中の“ザ”が付きまといまいます。

私の観念かもしれませんが、市販の頭痛薬でも商品名に濁点を含むバファリンが強烈に効き、商品名に濁点を含まないロキソニンやナロンエースのほうが、より優しく効いてくれそうなイメージがあるのは、やはり濁点の有無のせいかもしれないかもしれません。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」(マガジンハウス)をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平
新紀元社 (1,080円(税込))販売中。